

H29 年度 環境委員 B 研修 1

2017 年 5 月 26 日 ウィル愛知

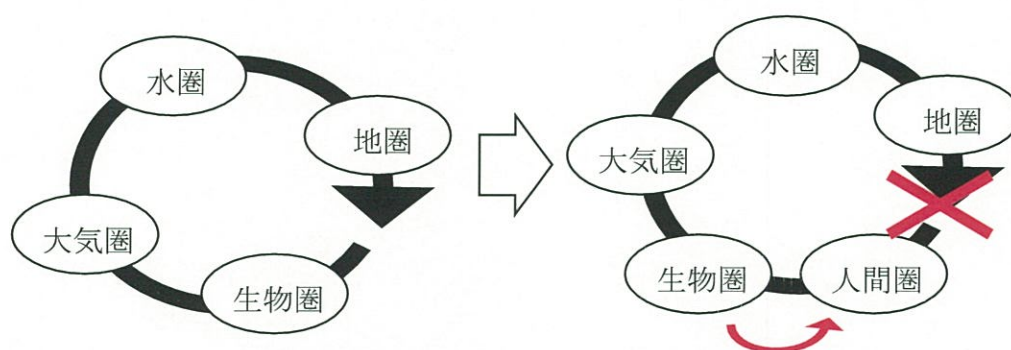
講師：牧原東悟

年 6 回行われる環境教育研修会を始めるに当たり、第 1 回目の今回は委員長の牧原東吾より委員会自体の理念、また自然環境保育の大切さを基に講義が行われた。

【講義内容】

✓自然環境の破壊

かつて地球では「地圏」「大気圏」「水圏」「生物圏」が上手に循環し活動していた。しかし、人間が生物圏という枠では括れない存在になると、うまくいっていた循環に大きな影響が出てきた。人間は自分たちの求める生活、生き方のために自然に多大なる被害をもたらすようになった。



人間が生物圏では括れない存在になり、今までの循環を乱す存在になった。

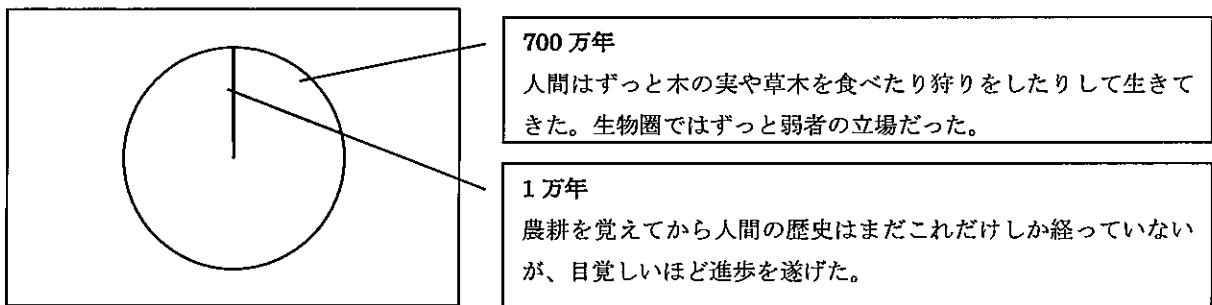
✓なぜ人間はそういう立場になった？

約 1 万年前に人間は農耕を発明し、食料を安定して得やすくなった人間は種の繁栄も安定できるようになった。

また、人間は約 200 年前に起こった近代工業化で、他の圏のサイクルを乱してしまう決定的な存在となってしまふ。人間たちは自らを生物圏とは同じ括りにできない存在にしたのだ。

人類が誕生して約 700 万年経つが、人間はたった 1 万年のうちに地球を滅ぼしかねない存在になってしまった。

グラフにすると、どれだけ短時間のうちに人間が地球に影響をもたらす存在になったのかよく分かると思う。分かりやすく「700 万年」を 24 時間にしてみると、「1 万年」という時間はたった 2 分ほどに過ぎないのだ。



人間の狩猟生活と農耕生活の時間の比較

環境問題とは、我々、人間のあり方を問うことである。循環していた環境を壊してしまったのは私たち人間なのだから。

✓環境危機に対してどう対策するか？

☆法やルールで規制する。

排ガスの規制、フロンガスの削減といった法やルールを整備し抑制する。



☆技術を進歩させることで環境に優しい物を作る。

省エネ家電、ハイブリッド自動車など環境に優しい機械、装置を発明する。



現状の把握、対策を講じることやみんなで考えること、そういった方向から環境へアプローチする考え方は一般的に広められ、またその知識を多く持つことは良いとされている。しかし、専門家でもなく発言権のある政治家でもない多くの人は、あまりに大きな問題にどうしたらいいのか分からないのが現状だ。

✓わたしたち保育者ができること

環境問題という大きな問題の中で私たち保育者ができることは何かあるのだろうか？

と考えてしまう。しかし、私たちだからこそできることがあるのだ。それは…

☆自然を大切に思う子どもたちが育つ教育、保育を行う。

「子どもたちが自然を愛する心を持てるように育つこと」。知識をたくさん知るのではなく、自然を愛する心が育つことこそ大事ではないだろうか？



そう、子どもたちを自然に興味関心に持ち、愛すことのできる子になる（なりやすい）

環境は私たちにも作れるはずだ。

私たちは、残念ながら興味の持てる物にしか大事にしない（しにくい）。多くの大人の常識や衛生観念に囲まれて育った子どもはきっと自然に興味を持ちにくいだろう。

街の中にもコンクリートの園庭でも、よく見ればどこかに自然は存在する。それに気づき、興味を持ち、五感を使って感じてみようとする子どもたちの思いを、大人の観念だけで遮ってはいけないのだ。

また、子どもの育ちと自然とは非常に相性がいいものなのだ。

✓ 子どもの育ちと自然とは？

自然の中には子どもの育ちに必要なものが溢れているのだ。「あっちはクモの巣が張っている。」「こっちは転びやすそうだ。」と、人工物のない場所では歩くのにも状況判断が必要になる。

五感を使って感じ、経験として自分のものにしていく。その経験を重ね、次のことに活かしていく。それこそが子どもの成長に大切ではないだろうか。

また、自然の中の方が重大な事故は圧倒的に起こりにくい。コンクリートと落ち葉、どちらで転んだら大変なのかは明白だ。どこまでを怪我と呼ぶかは園によって違うだろうが、擦り傷やかすり傷も子どもたちの経験なのだ。次に同じことをしないためにどうすればいいのかを考えることも必要だ。大人たちが過保護になりすぎて、最初から機会を奪いすぎてしまっってはいけない。

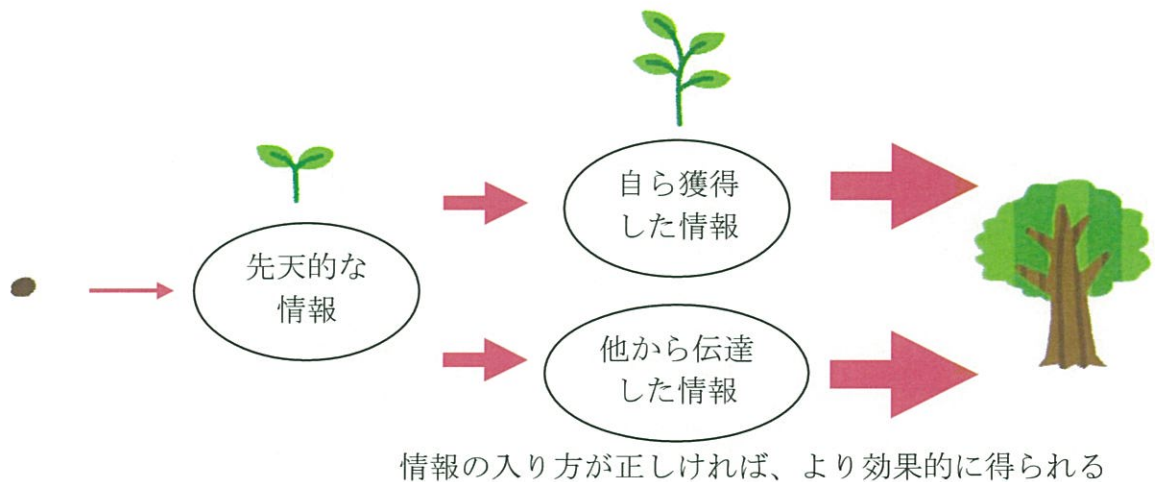
✓育ち=情報を獲得すること

成長とはいろいろなことを知ることでもある。知っていく、関連性を理解し付き合っていく…情報を獲得していくということなのだ。情報を獲得するには以下のような方法がある。

①	自ら獲得した情報	自分の経験から得た情報
②	先天的な情報	遺伝子で受け継いだ情報
③	他から伝達した情報	人から得た知識

これらの方法の中で、自ら獲得した情報がとても大事である。経験の少ない子どもたちは自分の身体で様々なことを学び知っていく(情報を得ていく)ことが大事だからだ。

先天的な情報、他から得た情報も大事だが、自ら獲得した情報が最初にあって、それと結びつくことによりもっと活かされるのだ。



「自ら獲得した情報」を使って得た「情報」は、「先天的な情報」や「自ら獲得した情報」と組み合わせることで「新たな情報」として獲得できる。この順序が反対だと意味がなかったり大きな効果は得られなかったりする。

✓人間も動物

経験の少ない子どもたちが何かとできないのは当たり前だ。それを「できるようにする」ように引き上げるのが今の社会体質だが、本来は「できるようになる」はずなのだ。それらを大人たちが待てなかったり、目に見える数値でしか判断できなかったりと結果ばかり望んでしまい、自分の子がまわりと違うと親は心配をしてしまう。そういった親の考えにも社会の

子どもたちが子どもらしく過ごせる環境、子どもたちにとって一番必要なのはなんだろうか?と考えたときに、先に述べたように、子どもに必要なのは知識でも伝えられたものでもない。自分の体験が大事なのだ。

知識だけでうまくいく場合があるのは私たち大人の場合で、経験がまだ浅い子どもたちには難しいことである。

自分が興味を持って、意欲的に多くの情報を獲得していく。それにはやはり遊びを通じた方が効果的だ。また、人工物で作られた遊びよりも、安全で、子どもが興味持てる物が多く、五感をフルに使いやすいものは自然物の中だということも先に述べたとおりだ。人間が生物圏という枠からはみ出したとしても、人間はやはり動物で、DNA レベルで野生の本能は持っているのだ。